

M-GTA 研究会 News letter no. 41

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

<目次>

- ◇第 50 回研究会の報告
- ◇北海道M-GTA研究会 夏合宿の報告
- ◇近況報告：私の研究
- ◇第 2 回修士論文発表会のご案内
- ◇編集後記

◇ 第 50 回研究会の報告

【日時】2009 年 8 月 1 日（土曜日）13：00－18：00

【場所】立教大学（池袋キャンパス）5 号館 5301 教室

【出席者】67 名

<会員（54 名）>

・浅野 正嗣（金城学院大学）・阿部 正子（筑波大学）・阿部 康子（愛媛県立松山商業高等学校）・五十公野 由起子（浜松医科大学）・市江 和子（聖隷クリストファー大学）・稲垣 尚美（横浜国立大学）・氏原恵子（浜松医科大学）・歌川 孝子（新潟県三条地域振興局）・江口裕美（久留米大学）・大澤 千恵子（淑徳大学）・大島 聖美（お茶の水女子大学）・大見 サキエ（浜松医科大学）・大村 光代（愛知新城大谷大学）・沖本 克子（広島大学）・小倉啓子（ヤマザキ動物看護短期大学）・加藤 千明（浜松医科大学）・加藤 基子（埼玉医科大学）・木下 康仁（立教大学）・倉田 貞美（浜松医科大学）・小池 磨美（高齢障害者雇用支援機構）・小松まどか（高齢障害者雇用支援機構）・坂本智代枝（大正大学）・佐川 佳南枝（立教大学）・櫻井美代子（東京慈恵会医科大学）・佐鹿 孝子（埼玉医科大学）・柴田 弘子（産業医科大学）・清水 小織（国際医療福祉大学）・高橋 由美子（浜松医科大学）・竹下 浩（ベネッセコーポレーション）・巽 あさみ（浜松医科大学）・坪見 利香（浜松医科大学）・遠山 由香梨（ルーテル学院大学）・都丸 けい子（平成国際大学）・成木 弘子（国立保健医療科学院）・西川 正史（ル

ルーテル学院大学)・林 裕栄(埼玉県立大学)・日野浦 裕子・平澤 一郎(ルーテル学院大学)・深澤 信枝(ルーテル学院大学)・藤丸 千尋(久留米大学)・増田 早苗(ルーテル学院大学)・松尾 浩司(浜松医科大学)・松繁 卓哉(国立保健医療科学院)・松下 年子(埼玉医科大学)・松戸 宏予(コロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校)・宮崎 貴久子(京都大学)・宮田 久枝(園田学園女子大学)・森實 詩乃(国際医療福祉大学)・門田 久美子(ルーテル学院大学)・八尾田 麻貴(浜松医科大学)・安原 千賀(聖学院大学)・山口 みほ(日本福祉大学)・山崎 浩司(東京大学)・渡辺 真理子(ルーテル学院大学)

<非会員 13 名>

・青木 智恵(新宿区社会福祉協議会)・浅川 典子(埼玉医科大学)・李 恩心(東洋大学)・石原 恵子(南山大学)・井澗 知美(中央大学)・神田 雅貴(聖学院大学)・黒川 京子(日本社会事業大学)・柴田 容子(ルーテル学院大学)・千住 晃(宇部フロンティア大学)・坪田 明子(北里大学)・松本 敦子(筑波大学)・宮城島 恭子(浜松医科大学)・和田 ミヤコ(北里大学)

【第一部 研究結果の活用に向けて】

小池 磨美、小松まどか(高齢・障害者雇用支援機構)

「精神障害者(統合失調症者)の就労支援における当事者のニーズと行動に応じた支援の展開プロセスについて」

I 報告書に関する結果の報告について

1. 研究テーマ

現在、精神障害者の就労支援は、職業リハビリテーション機関や一部の医療・社会福祉機関などそれぞれの法的根拠や背景となる考え方のもとに、それぞれ独自の「就労支援プログラム」として展開している。それぞれの機関・施設が多様な展開をしている精神障害者の就労支援ではあるが、日常的に行われている実際の支援においては、当事者のニーズや希望に応じた、あるいは、当事者の認知や行動の変容を促すような支援者の対応が展開されていると考えられる。そのため、様々な機関・施設の精神障害者を対象とする就労支援における当事者のニーズや行動に応じた支援者の判断と支援行動、及びその変化についての分析を行うことで、多様な「就労支援プログラム」に共通する支援者の判断と支援行動のプロセスを示すことを目的とする。

2. M-GTA に適した研究であるかどうか

・就労支援が支援の利用者である当事者と支援の実施者である支援者を中心とした相互作用を通じて展開すること

・その展開には必ずプロセス性が伴うこと

・分析結果をもとに、就労支援のノウハウを提示できるようなツールの作成を検討していること

以上の点から、M-GTA に適した研究であると思われる。

3. 現象特性

心臓のポンプ運動と血液の循環、そして、それらの動きが人の身体機能をささえていること。

支援者の支援行動のプロセスは、常に支援者の判断をもとにして具体的な支援行動が起こされている。この支援行動は、以前に行った支援行動の結果として現れた当事者の変化や当事者や環境の特性から生じた動きに応じて、再び、支援者の判断に基づいて行っているものである。血液の循環は心臓のポンプ運動により心臓から新たな血液が送り出され、体中を巡った血液が再び心臓に戻るといふ、繰り返しの循環運動がされているように、就労支援の支援行動も、基本的には当事者の意思決定を踏まえた支援者の判断をもとに就労支援活動全体に波及的に繰り返され、その結果や影響が再び当事者の意思決定を踏まえた支援者の判断の根拠となっている。

心臓のポンプ運動においては規則正しい拍動によって、血液は血管という常に同じ流れを通過して再び心臓に戻ってくるが、このポンプ運動は支援行動の対象となる当事者や環境のその時々状況や課題に応じて、支援や働きかけの範囲や強さが異なった運動を複合的に展開している。すなわち、同時並行的に複数種類の支援行動を行い、それらの行動が相互に影響しあう状況が繰り返し、展開されている。

また、この循環は心臓と血液の流れの循環が身体機能の基本であるように、就労支援活動の基本として捉えられる。

4. 分析テーマの絞込み

本研究では、精神障害者、特に統合失調症者の就労支援が時系列的にどのように展開されているのか、また、就労支援を展開していく上で、支援者の当事者に対してどのような判断と支援行動を行っているのか、さらに、精神障害者に対する対人援助の際に重要となってくる当事者の意思決定に関する支援がどのように行われているのかについて焦点を絞って明らかにしたいと考えた。よって、以下の3つの視点を分析テーマとして設定した。

- ①「統合失調症者の就労支援の展開プロセスの分析」
- ②「統合失調症者の就労支援における支援者の支援行動のプロセスの分析」
- ③「統合失調症者の就労支援における意思決定を支える支援プロセスの分析」

なお、本発表では、②及び③の結果について述べることとする。

5. 分析の方法

実際の分析にあたっては、研究員2名の間で、分析テーマや分析焦点者について理解を共有し、データからのバリエーションの抽出及び概念やカテゴリー生成、結果図の作成に至るまで共同で分析作業を進めていった。また、2名の研究員で継続的比較分析及び理論的サンプリングの作業を行った。

6. データの収集法と範囲

データ収集法:調査は、平成19年6月から平成20年1月の間に、17名を対象に、インタビューを実施した。インタビューは、各施設にインタビューワーが訪問し、支援者に対して各1時間半程度、半構造化面接を実施し、録音した内容について逐語記録を作成した。インタビューでは、はじめに「統合失調症者の就労支援で、いつもどんなふうにされていますか?」という質問を行い、具体的な事例等を交えながら自由に話をしてもらった。

表1 対象者の概要

	性別	経験年数	所属施設の種類の	就労支援のためのプログラムの特徴
A	女	20	就業・生活支援センター	施設内トレーニング(有期限・更新無)・ジョブコーチ
B	男	8	就業・生活支援センター	〃
C	女	5	就労移行事業所	〃
D	女	10	小規模授産施設	施設内トレーニング(有期限・更新有)・ジョブコーチ・過渡的雇用
E	男	22	クラブハウス	〃
F	女	23	就業・生活支援センター	〃
G	男	7	就業・生活支援センター	施設内トレーニング(有期限・更新有)・ジョブコーチ・グループ就労
H	男	6	就業・生活支援センター	〃
I	女	4	指定障害福祉サービス事業所	〃
J	女	8	就業・生活支援センター	〃
K	男	13	障害者職業センター	施設内トレーニング(有期限・更新無)・ジョブコーチ
L	女	12	障害者職業センター	〃
M	女	14	障害者職業センター	〃
N	女	25	障害者職業センター	〃
O	女	3	クラブハウス	IPS
P	女	6	精神科病院	IPS
Q	男	10	クラブハウス	施設内活動(無期限)・ジョブコーチ・過渡的雇用

範囲:インタビュー対象者の所属する施設等は、①障害者職業センターにおける自立支援事業のような基礎的な労働習慣の習得等を目的とするトレーニングなど就職活動以前のオフザジョブでの訓練(施設内トレーニング)または、施設内活動を実施しているところ、②施設内でのトレーニングではなく過渡的雇用のようなオンザジョブトレーニングを実施しているところ、③IPS モデルのように特定の訓練や職場体験などのトレーニングを原則として実施しないところの3種類に大別される。(①と②については、いずれかのみのところ有り、両方を併せて実施しているところもある。)これは、現在行われている就労支援の枠組みを網羅すべく、インタビュー対象としたものである。(表1参照)

7. 分析焦点者の設定

「独自の『就労支援プログラム』に基づき、統合失調症圏の人たちの就労支援を実施している機関・施設において、一定年数以上の就労支援経験を持っている支援者」

8. 分析ワークシート 配布資料 略

9. カテゴリー生成 配布資料 略

10. 結果図②③ 配布資料 略

11. ストーリーライン 配布資料 略

12. 方法論的限定の確認

「5. データの収集法と範囲」のところで述べたように、就労支援の枠組みを網羅した施設を選択し、データの対象としたことで、就労支援のプログラム形態に留まらない、多様な支援形態に共通する支援についての分析を目指した。

13. 論文執筆前の自己確認

① この研究で自分は何を明らかにしようとしたのか

統合失調症者の就労支援を行っている支援者が、どのような判断や支援活動を経て、就労へ結びつけようとしているのかを明らかにしたいと考えた。

② この研究の意義は何か

多様なプログラムのもとに様々な機関・施設で実施されている精神障害者の就労支援において、当事者のニーズや行動に応じたプロセスがあり、それに基づいた就労支援における共通する視点や支援行動が明らかになったことで、ノウハウの共有化に向けた試みとして捉えられること。

③ その結果、何が分かったか。つまり、この研究がオリジナルに提示できる結論は何か

就労支援の支援行動は、当事者の意思決定を踏まえた当事者や環境への働きかけとその両者のその調整として展開され、常に複数種類の支援行動が同時並行的に展開されている。その結果と当事者と環境それぞれの特性から生じる変化が相互に影響しあい、再び当事者の意思決定から始まる支援行動が生じているといった循環式で複合的な支援行動を支援者が担っているということ。

④ 現実的問題に対しても、理論的問題に対してであれ、どういうプロセスを明らかにすることができたのか

現在、精神障害者の就労支援は、従来から行われてきている段階的な支援プロセスとIPSに代表されるような当事者の要望に応じた、就職活動ありきのプロセスとが、そのエビデンスを競っている状況にあるが、循環式で複合的な支援のプロセスは、どちらのプロセスにも共通するものだといえる。

⑤ 該当する場合には、どのような援助の視点が得られたのか

職業リハビリテーションにおいては、「職業相談」「職業評価」「訓練」「求職活動」「フォローアップ」という、プロセスが一般的に示されているが、このプロセスに縛られないで就労支援全体の動きを明らかにすることによって、支援行動が同時並行的で波状的に行われており、繰り返しの中で変化する循環式で複合的なプロセスから成り立っていることが示せるであろうこと。

Ⅱ 「就労支援ハンドブック 統合失調症を支えるために」について

1. 構成

はじめに

分析テーマ「就労支援における支援行動のプロセス」に基づく結果図の説明

結果図が網羅的で、概念数が多いために、まず、カテゴリーに基づく全体図を概略図として提示し、カテゴリーを中心とした全体の動きを説明している。

次に、13 のカテゴリーの一つ一つをその構成する概念と動きで説明している。

結果図の動きを説明するにあたって、3 つの事例を用いて、説明している。

分析テーマ「意思決定を支える支援プロセス」に基づく結果図の説明

ここでは、比較的概念数も少ないため、結果図の特徴的な動きについて、6 つの事例を用いて、説明している。

コラム

結果図の説明や事例だけではわかりにくい、インタビューデータなどで示された支援者（分析焦点者）の視点やコツといったものを結果図と関連付けられるページに記載している。（4 か所）

Q&A

インタビューデータで示されていた、支援者の持つ就労支援についてのノウハウを支援者（分析焦点者）の視点からの Q&A に盛り込んだ。

おわりに

2. 背景

（1）研究のあり方

当機構の研究のあり方として、研究成果の現場への還元という視点があり、研究成果を報告書として取りまとめるだけでなく、資料集、ハンドブック、ガイドブック、リーフレット、チェックリスト等の成果物を作成することが求められている。

（2）研究計画の策定

研究計画の提案は①研究員の希望によるもの、②障害者の就労支援業務からのニーズを反映したもの③政策的な意図を反映したものの 3 種類に分類されるが、実践現場のニーズに応えられるものであることがその選定の大きな理由となる。

そのため、研究計画を取りまとめるにあっても、研究の背景と目的、スケジュール、経費だけでなく、その成果物についての見通しが求められている。

3. 成果物作成の経過

上述したように、研究の成果を報告書だけでなく、他の形式での成果物を作成することが研究計画を策定する段階から求められていたこともあり、研究方法を検討する段階から、成果物を形にしやすい方法を求めていることも研究方法として M-GTA を選んだ重要な理由であった。

成果物の検討開始時点では、結果図をもとにした相談ツールの開発を考えていた。しかしなが

ら、M-GTA を用いるのが初めてのこともあり、分析に時間を要し、ツールの開発とその試行・分析といった過程の時間を割くことができなかった。

また、成果物として、チェックリストの開発を指摘されたこともあったが、結果図を元に項目の構成を検討したとしても、各項目を、結果図に現れたような複合的な条件に応じて段階化することとその結果を検証することが困難だと考えられた。

このような経過の中から、分析の結果をより分かりやすく、現場の実践者が必要に応じて、簡便に取り扱えるような冊子の作成が望ましいのではないかと考えるようになり、事例を交え、結果図には盛り込むことのできなかったインタビューデータに表れている熟練支援者のノウハウを盛り込んだ冊子の作成をすることとした。

4. ハンドブックに関する評価

(1) 外部評価委員から

- 「ノウハウを共有するための就労支援ハンドブックを作成しており、(M-GTA が意図している) 実戦的応用のプロセスに結果を委ねる段階にある。」(Y 氏)
- 「就労支援ハンドブックが作成されたことは、実践的応用に向けて意義が高い。」(Y 氏)
- 「研究報告書の内容を実践的で、わかりやすくした『就労支援ハンドブック』も含め、第一線の担当者に有益と考える。」(S 氏)
- 「研究成果をハンドブックにして成書とした点も優れている」(N 氏)
- 「ハンドブックに落としたことによって、有用性はさらに高まった。この領域における初心者にも心得として有用であろう。あるいは、紙媒体だけでなくIT化する可能性もあろう。」(N 氏)

(2) 現場の実践者から

- 「報告書とハンドブックを数度読ませていただき、各プロセス内でのカテゴリー、概念の抽出は、納得の連続でした。これまで行ってきた支援がこうした形で言語化され、結果図になったのは嬉しく思いました。時系列、段階的ではなく、循環的な展開であることの明示により救われたような気がしました。故に今後しばらくは修正版 M-GTA を傍らに、支援を実践検証しながら進め、いずれは当施設の社会的役割の視点からオリジナルの修正を加え、応用していきたいと考えます。」(精神障害者授産施設の就労支援員)

5. ハンドブックの活用に向けて

現場の実践者の方からは、具体的な活用の可能性について、次のような意見をいただいています。

「まず第一に、私自身が転職組で経験が浅い事から、実習性の皆さんへ支援プロセスについて理論的に説明することが難しく、いつも個別支援という言葉で対処し、全体像についての説明がなされていなかったため、新任職員さんや実習生さんにタイミングを計って読んでいただこうと考えています。次に、就労困難なケースを検討する際に、職員間で支援過程を整理し、方針を決定するため共通認識が持ちやすいと思われますので、見やすいハンドブックは大いに活用できそうで

す。更に、就労支援がうまくいった場合の職員間の振り返りの際に活用し、施設全体のサービス向上のための検証に使わせていただきたいと思います。」

今後のハンドブック活用については、利用者に対する具体的な支援策の検討、利用者の支援過程の整理、支援者の学習(事例検討)、経験の浅い支援者への指導、支援者間での共通基盤の確立などにむけた活用が可能だと考えられる。

<質疑応答>

意見:分析結果及びハンドブックの意味として、経験の浅い人たちにとっての意味だけでなく、熟練した経験者についても一定の意味があるはずであり、それを明らかにすることが大切ではないか?経験者の意味を問うためには、何らかの提案ができないといけないと思われる。

回答:どう活用していくのかを提示していくことが必要。

意見:分析結果を取りまとめ、ハンドブックを作った次の段階として、ハンドブックを使う人が修正し、使えるものにしていくことが大切。ただし、そのためには、方向性を見出さないと活用しにくいと思われる。今後は、第2段階の研究として、修正をして独自バージョンを作成するための実践者(現場)への働きかけが必要になるのではないかと。

回答:働きかけの最初として、報告書・ハンドブックを外部へ提供する際にアンケートをはさみ込み、次の段階の下地にすることは考えられる。そのアンケートの返信により、方向性を見出したり、一緒に研究を進めていけるメンバーを見出すことも可能と思われる。また、研修や人材養成の場におけるプログラムにハンドブック等を活用していくことができれば、数量的なところも含めて、検証となるのではないと思われる。

意見:分析結果を共有したメンバーでの事例検討では不十分と思われる。活用に向けた働きかけを検討するためには、ある程度集団化していることが望まれる。現在の研究組織での継続的な研究が難しいのであれば、組織を超えた集団(例えば、就労支援を行っている人たちの集団など)へのグループインタビューを行い、現場で実践できる形を整えることも一つであろう。

<感想:小池>

M-GTAが分析結果を現場に還元し、理解・検証され、さらに応用につなげることが重要なポイントであるにもかかわらず、今年の3月に研究報告書とハンドブックが出来上がったことで、一息入れてしまっていました。大きな宿題をいただき、何から手を付けたらいいのか、まだ、アイディア一つ浮かんでないのですが、この研究結果を踏まえて、次のステップに向けて、何が出来るのかを地道に考えていきたいと思っています。

ありがとうございました。

<感想:小松>

今年の4月に異動になり、研究という立場から現場での実践者としての立場に変わりました。現場では、統合失調症者の対応ばかりではないので、研究結果を活用する機会はそう多くはないの

ですが、研究で見出した考え方を就労支援の中で生かしている点では、この研究に携わってよかったと感じています。また、今回の研究会でご意見をもらうことによって、確かに成果物を発行ただけで終わってはもったいないと感じ、活用方法についての働きかけも広く周知できれば、活用してもらえる機会が増え、ハンドブック等を作成した意味がより実感できると思われました。いただいたご意見を基に、今後も生きた成果物にするための取り組みを進めていきたいと思います。

ありがとうございました。

【第二部 研究発表】

高野 由美子(浜松医科大学大学院医学系研究科)

「子どもの立場に立った看護が実践できるようになっていくプロセス」

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

一人の受け持ち患児との関わりを通して看護実践を学ぶ小児看護学実習は、出会いから受け持ち終了まで、学生・患児・母親(家族)・指導者・学生仲間などが相互作用をしながらプロセス性をもって進行する。学生が、認知・コミュニケーション能力が未熟な子どもに、泣かれたり拒否されたりしながらも、子どもと関係を築き子どもの立場に立った看護が実践できるようになっていく過程を説明することはその指導に生かされ、実践的活用を意図した M-GTA が適している。

2. 研究テーマ

「子どもの立場に立った看護が実践できるようになっていくプロセス」

＜研究の背景＞

進歩した現代医療の中で学生に求められる能力は増大しており、学生のレディネスも変化している。看護基礎教育で身につけることのできる知識・技術は、修業年限・医療現場における制約もあり限界があるが、援助を必要としている相手へ向かう姿勢を培うことが重要である。小児看護学領域においては、子どもと接する機会が少ない学生が多く、子どもとの関係作りに大きな不安・困惑を感じている。加えて、多くの患児には家族が付き添っており、小児看護学実習は、大人の看護以上に、対象特性をふまえた関係能力が必要とされる。

そのような中で、学生はどのように子どもの立場に立った看護が実践できるようになっていくのか？小児看護学実習における先行研究は、困惑体験への対処や関係性成立を視点とした検討であり、学生の体験を具体的に説明した研究は少ない。

＜研究目的＞

小児看護学実習において、学生が何に気づき、何を考え、どう行動して子どもの立場に立った看護を実践できるようになっていくのか。そのプロセスとそこに影響を与える要因を明らかにし、小児看護学実習の指導に生かす。

3. 現象特性

実習での学生の体験は、「初めての相手と対戦するテニスプレイヤー」に例えられる。相手の様

子をうかがいながら試合が始まり、相手の打球や動きを捉えて返球し、相手の反応を確認して行く。相手への影響を見極め、的確に相手に返球することを試み、上手く返球できたときは喜びがあるし、上手く返球できないときは自分の力の無さにがっかりする。精一杯試合に臨み、試合が終わる頃には、達成感や次への課題を見出す。

4. 分析テーマへの絞込み

子どもの立場に立った看護を実践するためには、子どもの状況に気づき、その子にとって大切なことを判断し、気配りを持って対応することが求められる。分析テーマを「子どもの反応への応答が適合していくプロセス」とした。

5. データの収集法と範囲

1) 収集期間: X 年 11 月～X1 年6月

2) 対象: 実習前に同意の得られた看護学生11名

3) 収集方法: 小児看護学実習終了後3週間以内に1時間程度の半構造化面接

4) 質問内容

(1) 子どもに対するイメージ・子どもと関わった経験

(2) 受け持ち患児の基礎情報

(3) 実習での体験

6. 分析焦点者の設定

「小児病棟で受け持ち患児の看護を体験した学生」

7. 分析ワークシート 提示資料

小児看護の特徴が出ている「触発される情」を提示した。

8. 結果図 提示資料

子どもの理解ができてくことと、子どもへの愛情を感じることに動機づけられて、学生はその子のために何か役立ちたいという思いを持つ。しかし、子どもの反応に困り果てる体験の中で試行錯誤しながら応答のコツを掴んでいくプロセスがどのようなになっているのか上手く説明できなかった。概念が38生成された所で概念の見直しを行い、現在28の概念となっている。実習の流れを軸に関係や位置づけを何度も移動して関連性が見えてきたところでカテゴリー名を付けたが、中心概念と他の概念との関係や分析テーマとの関係をわかりやすく表現することが難しく、概念名・定義の修正とカテゴリー名の修正を行いつつ検討を進めているところである。

9. ストーリーライン 配布資料 略

10. 主な意見や質問、コメント

①インタビュー対象学生のバイアスの問題

②小児看護の特徴をどう捉えているかわかりにくい。成人看護を対立概念として表現したほうがよい。概念名は極力小児看護の特徴を表現すること

③研究の意義と今後の活用について

④分析テーマ「適合」の表現の適切性について多数のご意見、適合しているということについては誰が評価、判断するかについて

＜木下先生のコメント＞

* バイアスという言葉は、価値的な言葉なので、バイアスは悪いという意味を発生してしまうが、データ自体は基本的にはニュートラルなもの。どういう取り方であってもバイアスは何らかの形でかかるので、データの特性に関してどこまで自分が自覚的であるかということが大事である。

* 成人の場合と似たような感じがするという点について。結果図に小児の特性が十分に表現できているかどうかと考えるとよい。さらに、分析テーマの設定が小児看護実習の学生の経験を取りあげることに対応しているかどうかというように考えてみる。

* この分析テーマは小児でなくても十分成り立ちうる。もっと小児看護の実習に適した形に絞られればその方がいい。「適合」の仕方に小児看護特有の何かを見出していけば十分この分析テーマに対応した結論になるし、それは仮に同じ分析テーマで、成人の実習をやった学生に置き換えた時にも、それぞれの特性がしっかりと出てくる。適合というのは、相互作用の1つの形を明らかにする。反応と応答というのは単純な形として明らかにしやすいが、適合しない部分が適合していくという、そのプロセス的なものを明らかにできれば小児看護の特徴も表せるであろう。

* 評価、判断は最終的には分析者が行う。答えてくれた人がどう思っているかで判断するのではなく、最終的な解釈は分析する人間が行う。そのような設定にしないと解釈が非常に浅くなってしまう。分析者が外に出てしまうのでそれはよくない。今回の場合でいうと、適合ということとをどの位の幅で解釈していくかによって、もしかすると学生はそうは思っていないけれども、適合していると判断できる場合もあると思われる。解釈は、最終的には分析者がその判断をする。分析焦点者というのは、インタビューに答えてくれた人たちがどう思っているかを理解するだけではなく、その人たちが語ったこと、思っていることを分析テーマに照らして自分はどう読み取るかという、そういう関係で考えると当事者が思っている以上の意義の幅などが捉えやすい。

11. 感想

今回、貴重な発表の機会を頂きありがとうございました。データの分析途中で十分に焦点が定まっておらず発表では曖昧な表現の資料提示となってしまいました。

漠然としていた小児看護学実習での学生の体験が、概念から結果図を描くことで、発表前には

全体像を捉えることができてきたように思っていました。しかし、多くのご質問・ご意見を頂いたことで、自分が最も説明したいことは何なのかがまだ焦点化されていないことを痛感し、再度動機に立ち戻って考えました。説明したいのは、子どもの思いを察知して、子どもの立場に立った看護を実践することに学生がどのように取り組んでいるのか、その変化のプロセスです。今後、小児看護の特徴を念頭において、「子ども目線にシフト」を中心に、概念と概念の関連を考えながら結果図を描いていけばよいのではないかと考えています。修士論文提出まで限られた期間ですが、全力で取り組みたいと思います。皆様からの多数のご意見、ご助言をいただきことに心から感謝いたします。

松戸宏予(コロンビア大学ティーチャーズカレッジ日本校)

「大学生の義務教育期における調べ学習の取り組みのプロセスの検討」

1. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究は大学生が体験した義務教育期における調べ学習の振り返りを通して、調べ学習がどのようなプロセスを経ていたのかを説明しようとするものである。

特に、教育の領域にある、学校図書館という特定環境の中で、生徒と教師・学校司書の相互作用を通して、大学生が体験した調べ学習がどのような過程を経ていたのかに焦点をあてる。このことから、実践現場に基づいたM-GTAが本研究の手法として適していると考ええる。なぜなら、M-GTAは、社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に有効であり(木下,2003)人の意識面のみならず、行動の変容のプロセスも捉えることがこれまでの先行研究から実証されている。

また、今回の研究結果は、調べ学習を実践する上での見直しや要因を提示できる可能性があり、実践の場でその結果がさらに検証されていくものと考ええる。

2. 研究テーマ:「大学生の義務教育期における調べ学習の取り組みのプロセスの検討」

4. 分析テーマへの絞込み

- ① 大学生が当時、中学生(生徒)だったときに受けた調べ学習はどのような過程を経ていたのかを明らかにする。
- ② 教師と学校図書館担当者と生徒、また、生徒同士の相互作用が、調べ学習の取り組みにどのような影響を与えているのかを明らかにする。

5. データの収集法と範囲

「学習指導と学校図書館」受講生(A 大学 70 名と)を対象に、講義におけるグループ討議とワークシートを通して学生自身の中学時代の総合的な学習の時間や教科で行った調べ学習について振り返りを行う。

手順:

- ① 「学習指導と学校図書館」のプログラム第 8 回と第 9 回にかけて調べ学習とは何か、教育心理学的な見地からパスファインダー、問題解決の手順を学習する。
- ② 「学習指導と学校図書館」のプログラム第 10 回では、調べ学習で生じた問題事例に関する投稿を読んだあと、アメリカ図書館協会が作成した Know it all(注1)の DVD を視聴する。
- ③ このあと、グループで、「調べ学習で困った経験、それは何が要因か」、「アメリカの調べ学習と自分が体験した調べ学習の共通点と異なる点」について討議する。
- ④ そして、ワークシートで改めて、各個人の意見を「考えてみよう」欄の 3 つの設問に記述させる。

そのうち3つの設問のうち、「調べ学習で困った経験、その要因」と、「アメリカの調べ学習と自分が体験した調べ学習が異なっていた場合、その要因」2問を分析の対象とする(添付資料参照)。

6. 分析焦点者の設定

2008 年前期の受講者である A 大学 2～4 年生 70 名

7. 分析ワークシート:ひとつの概念生成例を挙げる (別添参照1)

* 命名、定義、ヴァリエーション、反対例の検討を含めた理論的メモのすべて

8. カテゴリー生成:概念の比較をどのように進めたかを具体例をあげて説明する。

* 木下康仁.(2003)グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂, p.153

「ひとつの概念を生成するときに同時にそれと関係しそうな概念の可能性も考えるという、多重の同時並行思考をすることで相互の関連性を絶えず検討していく」

① 生成中の概念と具体例および具体例と具体例の関係

＜自主性という名の放任＞を中心にみた例:

- ・ヴァリエーションのなかに、「長い時間を与えられても・・・」と時間を指摘しているものがあった。
- ・時間は、＜自主性という名の放任＞によって、影響を受けたものではないかと思った。
- ・時間を主にとりあげているヴァリエーションを独立させ、新しい概念を立ち上げる。
- ・概念名をつけるとき「動きのある名詞」

＜すぎゆく時間＞ →＜時のジレンマ＞に変更。

② 生成中の概念と概念の関係

＜自主性という名の放任＞を中心にみた例:

- ・＜自主性という名の放任＞は、分析対象者である大学生が各自の義務教育時代(小学校・中学校)の調べ学習のとりくみを振り返り、教師・学校図書館担当者との相互作用が学生(当時の生徒)にどのような影響を与えていたのかを知るうえで、核になる概念と感じた。
- ・上記の核になる概念と同じように、他にも相互作用から影響をあたえる概念が存在するのではないかと思い、分析ワークシートを見直したところ、以下の2点が該当した。

* ＜消極的な支援＞:担当教師や学校司書が学校図書館にいるにも関わらず、生徒から質問をしない限りはアドバイスがもらえない、あるいは、尋ねづらい雰囲気があること。

* ＜不十分なコラボレーション＞:1つ1つの授業が孤立して行われ、1人の教師しか授業計画(内容)を把握していない、あるいは、教科担任と学校司書がほとんど関わっていないこと。

③ カテゴリーと概念の関係

＜自主性という名の放任＞を中心にみた例:

＜自主性という名の放任＞、＜消極的な支援＞、＜不十分なコラボレーション＞を1つのカテゴリーに入ると考えた。

また、このなかで、上位概念はどれかと考え、＜自主性という名の放任＞が、他の＜消極的な支援＞、＜不十分なコラボレーション＞も包括する概念と考えた。併せて、カテゴリー名を、【自主性という名の放任】にした。

④ カテゴリーとカテゴリーの関係

【自主性という名の放任】を中心にみた例:

【自主性という名の放任】が、生徒の調べ学習の取り組みにどのような影響があるのかを考えた。生徒の行動の変容のプロセスでは【アクセスできない空振り】という現象面につながる。そして、【アクセスできない空振り】は、【やる気の減退】という生徒の調べ学習の動機づけにも影響をあたえていることにつながると判断した。

⑤ コアカテゴリーと他のカテゴリーの関係

生徒の調べ学習のとりくみに対するプロセスと相互作用があったカテゴリーを分かりやすくするため、生徒の調べ学習のとりくみに対するプロセスにあたるカテゴリー部分を大きな四角でまとめた。生徒の調べ学習のとりくみに対するプロセスを本研究におけるコアカテゴリーとする。

9. 結果図: 図の提示だけでなく、どのように図を作成していったのか。(別添参照3)

スライド1

分析ワークシートを通して、概念生成をしながら、ざっくりと概念の関係、つまり、生徒の調べ学習に対すとりくみのプロセスとそのとりくみに影響を与えている要因との関係を考えながら図にあらわした。

スライド2

概念の生成をさらに続行しながら、生徒の調べ学習に対すとりくみに影響を与えている要因(調べ学習担当教師や学校司書)を検討していった。
→この段階で、研究発表に応募。発表要綱に照らし合わせて、私自身が気になっていたM-GTAとKJ法の違いを整理した。そして、再度、分析ワークシートをみなおしを始めた。

スライド3

分析対象者の目線で、彼ら自身のとりくみ、そして、阻害要因を検討したところ、【アクセスできない】では、生徒の行動と阻害要因を混合していることに気がついた。
＜限られた環境＞＜司書を知らない＞＜利用しなかった外部施設＞を阻害要因として1つのカテゴリーにまとめた。上位概念として、＜限られた環境＞をカテゴリー名とした。
学校図書館における調べ学習の行動なので、学校図書館枠としておおきな四角でかこった。
＜自主性という名の放任＞の分析ワークシートには、時間についての記述が何点かあることに注目した。【やる気の減退】に関連する概念ではないかと思い、＜時がすぎゆく＞を生成する。

スライド4

【限られた環境】と他のカテゴリーの関係をみたときに、【限られた環境】と【自主性という名の放任】が、【アクセスできない】につながるのではないかと考えた。
また、概念名は動きのある名詞であることを踏まえて、また、定義に照らし合わせながら【アクセスできない】から【アクセスできない空振り】に変更した。
＜時がすぎゆく＞も、＜時のジレンマ＞に変更した。

スライド5

カテゴリー同士の関係を考える。生徒の調べ学習のとりくみに対するプロセスと相互作用があったカテゴリーを分かりやすくするため、生徒の調べ学習のとりくみに対するプロセスにあたる部分を大きな四角でまとめた。

まちがい: スライド5 形骸化された調べ学習のプロセスとその要因5

訂正: スライド5 生徒の調べ学習における取り組みのプロセスとその要因5

10. ストーリーライン

調べ学習が始まるときに、教科担当者から取り組むテーマが生徒に伝えられる。しかし、その際にテーマを通して何をあきらかにするのか、また、具体的な調べ方の手順が示されていないなど

＜調べに対するあいまいさ＞がある。そのため、生徒はテーマに対して＜見えない目的と方法＞のまま、「図書館へ行って調べる」段階へ進む。

しかし、教科担当者は、生徒に発見させるという【自主性という名の放任】で具体的なサポートが十分行われていない。教師のみならず学校図書館担当者も生徒から質問をしない限りはアドバイスをしない、あるいは、尋ねずらい雰囲気がある＜消極的な支援＞である。また、教科担当者と学校図書館担当者の＜不十分なコラボレーション＞のため、探索するうえでの必要な学習スキルが教えられていない。

また、授業外に図書館で調べようと思っても、図書館に鍵がかかっているなど探索するうえで【限られた環境】となっている。また、実際に学校司書がいたとしても、＜司書を知らない＞つまり、学校司書の役割を知らず、相談できない。

このため、分類番号の見方を教えられていないため＜わからない分類番号＞、本の背表紙のタイトルからテーマのキーワードを探そうとして＜タイトルのみの検索＞となる。また、インターネットから情報を得ようとするが、情報検索理論を学習していないため、検索をしてもヒット件数が多すぎるか、あるいはヒットしないまま生徒の望む情報が得られないといった＜インターネットの空振り＞が生ずる。

このように、求める情報に対しての【アクセスできない空振り】現象が起こる。

そして、求める情報にアクセスができないまま時間だけが過ぎていき＜時のジレンマ＞となる。これらが、生徒の調べ学習の【やる気の減退】に影響を与える。また、グループ学習の場合、調べに対する＜グループ個人格差＞が生じる。グループの中で、特定の生徒が利用した＜一定の資料に集中＞するか、逆に、資料が多すぎて情報の選択に迷う、つまり、＜迷う情報の選択＞という結果になる。

しかし、教師側も【発表すればそれでよし】といった認識であるため、生徒は友人が調べたものをそのままノートに写す＜情報丸写し＞となり、＜つつつまあわせ＞の【ワンパターンの発表】という調べ学習のとりくみのプロセスは、形骸化された調べ学習であった。

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか(考えたとすれば、です)。

* 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか

分析ワークシートにヴァリエーションを抽出していくなかで、思いついたことをメモした。その時点でメモをしないと忘れるため。

* いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか

分析焦点者の立場で、彼らにとっての調べ学習(調べ学習)とは何だったのかを視点にヴァリエーションを抽出した。そして、ヴァリエーションから概念を生成し、概念と概念の関係を考えていくなかで、図がうかんだ。

* 現象特性をどのように考えたか

屋台骨(個々の研究において具体的な内容部分を抜き取ったあとにみえるであろう“うごき”の特性(木下康仁.(2007).ライブ講義 M-GTA. p.217)

一言でその現象を説明できるもの。その現象は他の分野にもありえる。

本研究においては「形骸化」がキーワードになる。形のうえでは一定のプロセスを辿っているものの、そのプロジェクトを通して果たして当事者は実質的な成果を得ていない。では、そのためには、どうしたら良いのかが、本研究における提言となる。

12. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点などを簡潔にまとめてください(できるだけ箇条書きに)

反省点: KJ 法と M-GTA の取り違い

* 今回の分析では半構造化による面接ではなく、授業用ワークシートによってデータを収集した。

そしてそのデータを基にクルトーの情報探索プロセスにそって分析しようと試みた。

* しかし、情報探索プロセスに沿った分析では進まなかった(動けなかった)。グルーピング化し

ても、そこから先には進めなかった(図1)。

- * そこで、M-GTAの分析ワークシートを用いて、分析テーマに焦点をあわせて分析を試みたところ、生徒の調べ学習の行動の動きが流れていく感覚を覚えた。
- * しかし、今回の分析テーマでは、意識の変容よりも、調べ学習の生徒の行動のプロセスを追っていたため、現象をまとめているのに過ぎないのではないかと振り返りを始めた。
- * そして、KJ法とM-GTAを表にまとめながら、結果図を見直し、現象をまとめているに過ぎないのではないかという反省に至った。
- * 再度、分析ワークシートを見直し、修正したのが結果図5である。

確認した点: 分析焦点者の記憶の振り返りに由来するデータの信頼性

2008年11月、図書館情報学会においてスライド2の段階を発表したところ、大学生が中学時代を振り返ったとしても、5年前のことは覚えていないのではないかと記憶を捏造しているのではないかと意見があった。データに対する信頼性を指摘したものである。

この点について、臨床実践のための質的研究法入門に振り返りの記憶についての記述、そして、「データは現実を反映したものであるが、この置き換えは本質的に不完全。データ化しないことには、現実が理解できない。どのように置き換えられているかについて、慎重でなくてはならない。ディテールの豊富なデータとは回答する人が制約の少ない方法で得られるものである。共通するのは、データのもつディテールさを活かす分析方法」

(木下,2003, p.65,66)

研究についてのアドバイス

(1)分析焦点者 現状の中学生を対象にしても良いのではないか

(2)分かりきったことを尋ねているのではないか

→調べ学習が機能していないという点については以前から指摘されているが、基礎研究はなく、具体的にどの部分につまずきがあったのかがM-GTAの分析を通して、今回、あきらかになった。

(3)なぜ、今の大学生が探索できないのかと、彼らの中学生時代に要因を求めるのは無理があるのではないかと。今の大学生に対してどういうプログラムがあれば良いのかについて着目した方がよい。

→研究の動機は、現在の大学生の情報リテラシーが身につけていないのはどうしてなのかといった点を端緒としていた。しかし、今、現在、行われている調べ学習も、大学生が体験した頃の状況と変わらない。

発表の後、司書教諭講習で小学校、中学校、高等学校の教員を対象に、「学習指導と学校図書館」という科目を担当した。そこで教員側からの意見をデータとして得られた。今後は、教師の意識に焦点を当てて、調べ学習の現状をあきらかにしていきたい。

最後に、発表に際して「分析を振り返って、M-GTAに関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点」を自己確認し、結果図の見直しを図る機会を与えて頂きましたこと、感謝します。

【SV コメント 小倉啓子(ヤマザキ動物看護短期大学)】

本研究の目的は、大学生が体験した義務教育期における探求学習の振り返りを通して、探求学習がどのようなプロセスを経ていたのかを説明することである。司書である発表者は、大学生への講義を通して義務教育期の探求学習の不十分さを感じ、実際に学生がどのように体験したかを明らかにする必要性を感じたとのことであった。

研究会で検討したいことは、現象をまとめているに過ぎないのではないか、行動を追っているだけの感じがする、M-GTA を用いた分析になっているのか、他研究会で中学時代の記憶によるデータの信憑性についての疑問があったがどうか、などであった。

1. 参加者からの質問・コメント

参加者から以下のような質問・コメントがあった。①アメリカでの実践 DVD を視聴したあと、自分たちの経験を振り返る形で得たデータには、否定的要因が多く出る可能性があるのではないか。②質問項目が「困った体験」であるため、否定的な体験を引き出しやすかったのではないか。③中学時代の探求学習経験と大学生の現状を結びつけるのは無理があるのではないか。④否定的体験だけではなく、成功体験はなかったのか(発表者回答によるとほとんどなかった)。⑤概念をみると、こういうことだろうと思われる結果であり、どの点がオリジナリティなのか。⑥データ収集方法からみて具体的でディテールに富んだデータが得られたのか。

2. スーパーバイザーのコメント

参加者からの質問・コメントは的確な指摘と思う。また、発表者が感じている「現象をまとめているに過ぎないのではないか、行動を追っているだけの感じがする、M-GTA を用いた分析になっているのか」という違和感は大事なことだと思う。

概念や結果図をみて、私は探求学習がうまくいかなくなる過程、「自主性という名の放任」になる過程がわかって、なるほどと思った。一方、悪循環の過程に関わる要因はあれこれ示されているが、ではどうすればよいのかが見えてこない。否定的要因をひとつひとつ潰していけばよいのか、それは可能なのか。つまり、悪循環をきたす要因を示しているだけで、問題解決や改善への道が示されていないと思われる。M-GTA を用いた研究の意味のひとつにヒューマンサービス領域で援助実践に有用な知見を生み出すということがある。その点で、現在の分析結果は悪循環への要因の関連図にとどまっていると思う。想像だが、発表者もそういう点で物足らなさ、違和感を感じたのかもしれない。

概念名では興味深い命名も多い。一方、＜消極的な支援＞＜不十分なコラボレーション＞などは具体性に乏しいので、中学生にとっての体験にもっと密着して、解釈し概念名を選ぶ必要があるだろう。授業のワークシートによるデータ収集であることから、M-GTA に適したデータかどうかを検討する必要があるかもしれない。

【第三部 構想発表】

山崎浩司(東京大学大学院人文社会系研究科)

「ライフスタイルとしてのケアラー(介護・養育)体験とサポートモデルの提案」**1. 研究班の体制**

文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)

研究代表者: 木下康仁(立教大学)

研究分担者: 小倉啓子(ヤマザキ動物看護短期大学)・標美奈子(慶応大学)・

中川 薫(首都大学東京)・山野則子(大阪府立大学)・山崎浩司(東京大学)

研究協力者: 佐川佳南枝(立教大学)

2. 「ケアラー」とは?

- care + er
- 主に日常生活の場(家庭や地域)で、養育・介護・精神的支援などのケア行為に携わる非専門職者

3. ケアラーに注目する理由

- 人口の高齢化、家族の小規模化、医療の進歩、福祉サービスの拡充などにより、現在では日常的に育児・養育・介護に携わる人々(ケアラー)が急激に増加している
- 家族周期および個人のライフサイクルにわたって、多様な形態でのケアが行なわれ、一般化した現象となっている
- 公的制度も多様な人々をケア提供者・利用者として統合化する方向で変化しており、専門職ではないケアラーへの支援は、重要な政策的課題となっている

4. 既存のケアラー研究の偏り

親子間・配偶者間ケアへの注目

- きょうだい間ケアへの注目は? 友人間・恋人間ケアへの注目は? ペット・飼い主間ケアへの注目は?
- 女性ケアラーへの注目
- 男性ケアラーへの注目は?
- ケアラーの抱える困難やストレスへの注目
- ケアラー体験による正の意味づけや心身状態の向上への注目は?
- ケア享受者とケア専門職・ケアラーとの関係への注目
- 容易にケアを必要とする立場に移行しがちなケアラーとケア専門職との関係への注目は?
- 専門職主導ではなく、ケアラー主導のセルフ・ヘルプ・グループにおけるケアラー体験への注目は?

5. 研究の目的

本研究では、これまで社会福祉、保健医療看護、保育などの領域に限局化され、統一的視点から研究されることがなかったケアラーの抱える問題を、ライフスタイルとしてのケアの視点からアプローチし、実態の理解に基づく地域社会を舞台としたサポートモデルの提案を目的とする。

6. 研究の方法

- ・ 多様な対象者の相互作用を横断的に分析
- ・ 学際的アプローチ（社会学・社会福祉学・看護学・臨床心理学・死生学）
- ・ M-GTA の統一的採用

7. 個別研究

- ・ さまざまなケアラー体験の把握（高齢夫婦間介護、成人障害者介護、子育て支援・虐待防止、障害児養育、ペット飼育・介護、死別後のグリーフケア）

8. 統合研究

具体理論からフォーマル理論（formal theory）へ

- ・ 具体理論を相互に比較分析
- ・ 共通性を軸にケアラー一般に適用可能な理論生成

（※配布資料に基づき編集担当が抜粋）

◇北海道 M-GTA 研究会 夏合宿の報告

北海道 M-GTA 研究会事務局 伊藤 祐紀子
（北海道医療大学看護福祉学部 所属）

8月1日～2日の一泊二日で小樽朝里川温泉にて、初めての合宿を開催いたしました。参加者は、宿泊が13名、宿泊無しが8名、講義のみが10名でした。北海道会では、まだまだM-GTAを使つての研究経験者が少ないため、分析技法に関しての講義からスタートいたしました。東京M-GTA研究会会長の水戸美津子先生より、「研究する人間」としてどのようにデータと向き合っていくのかをわかりやすく解説していただきました。講義の中で印象的だったのは、『研究する人間』が、データの分析を通して「いかにバージョンアップしていくのが重要」であり、そのためには「自分の脳を最適な状態にする」ということと「集中すること」という言葉でした。

午後から、データ提供者より、「スクールカウンセラーが中学校教師と関係形成していくプロ

セスの研究」の概要説明を受けたところで、分析テーマのディスカッションとなりました。参加者からのアイデアをもとにデータ提供者と分析テーマを確認し、「スクールカウンセラーと教師が中学生の悩みを解決していくプロセス」と設定したのち、グループ別のデータ分析となりました。多くの参加者がどこから手をつけていけばいいのか戸惑うなか、少しずつデータの表現していることは何か？何を意味しているのか？を読み解いていきました。

3 時間の集中的なディスカッションの後の夕食会場は、一瞬お通夜（！？）のような静まり具合で、企画者としては内心ドギマギしましたが、甘くてフルーティな小樽ワインが体に染みこむうちに、和やかな歓談の場となり胸を撫で下ろした次第です。

翌日の各グループの発表では、各グループともプロセスの一部を示す複数の概念を生成して、その関連を図示するところまで至りました。

終了後、参加者の皆様からは、「悪戦苦闘で大変だったが、M-GTA の分析手法の入口が少し見えてきた」、「まだまだ理解が深めないといけないが、M-GTA で研究を進めていく手がかかりを得た」、「本当に有意義な時間を過ごすことができた」、「自分に常に問いかけていながら進めていくんだなあ」などなど、多くのご感想をいただきました。1 度も合宿に参加したことがない企画者でしたが、東京 M-GTA 研究会の水戸先生、木下先生、佐川さんに相談にのっていただきながら、準備を進めることができました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

◇近況報告：私の研究

安藤晴美（埼玉医科大学保健医療学部看護学科）

お世話になっております。看護系大学で小児看護学の教育に携わっております安藤と申します。

私は、病院の小児科病棟に勤務していたときに興味・関心を持ちました NICU の看護師の親子関係形成の支援に関することを研究のテーマとして持ち続けています。修士論文では、このテーマの中の NICU 看護師の親への支援に関する“思い”に関してまとめました。それから継続し、親子関係が形成されていなければ子どもの虐待につながる可能性も考えられているということが言われているため、子ども虐待予防を目指した親子関係形成の支援に焦点を当てて研究を進めていきたいと思っていますところです。NICU の看護師の皆さまのご協力により、たくさんのお話を聴かせていただけデータが集まりました。しかし、そこから進んでいないのが今の状況でございます。

昨年度の夏の M-GTA 研究合宿に参加させていただきました。そこでは自分が考えていた「分析テーマの設定」に甘さがあったこと、加えて、そのことこそが難関であることを自覚しました。合宿後、既にいただいたインタビューデータの読み込みを改めて行い、分析テーマを設定し、何度も取り組んではみましたが、今一つ納得できず先に進むことができませんでした。そうして半分挫けた状態になり、本当に M-GTA を用いて分析することが適しているのかと考え、いろいろと質的研究に関する書籍や先行文献を読み漁りました。そして、迷いに迷い、巡り巡って M-GTA に辿り着

いた？戻ってきた？のが、つい最近のことです。今度こそ、本腰を入れて取り組んでいきたいと思っていますところですよ。

今後、研究を進めていくにあたり、研究会でも発表させていただき、先生方、研究会の方々のご意見やご指導をいただけましたら幸いに存じます。その際は、どうぞよろしくお願いいたします。

.....

日野浦裕子(在宅ケアクリニック川岸町)

私はケアラー体験の活用を目指しているおばさん看護師です。今までの経験を考慮した寛大な社会人枠で大学院に入学し、厚かましくも修士を終えさせていただきました。

そんな私の研究の対象は遷延性意識障害患者です。呼吸はしているものの、体は歪に変形し、他者から意思を理解されずに全介助を受けている長期の寝たきり患者です。患者数さえも調査されず、尊厳死や安楽死の的にまです。『おはようございます。暑いから、カーテンしますね。』『ラジオを付けます。この曲は〇〇さんの好きな音楽でしたね。』という調子で話しかけます。患者は私の声を判別し、微妙なサインを示します。しかし、残念ながら多くの看護師は声かけがなおざりになり、私は異質の存在となります。私たちは自分の大切な人が遷延性意識障害患者になったら、声もかけずに仕方がないと諦めてしまえるのでしょうか。実践現場の医療者が患者の回復を諦めているとしたら大問題で、このことを絶対に見過ごすわけにはいかないと思うようになりました。

遷延性意識障害患者に実験研究を行い、独りでまとめ、無謀にも学会に発表しました。回復の効果の感触を得ましたが、看護師により効果が異なるというバイアスにぶつかりました。そこで、独学で研究する困難さを修士教育で埋めてもらいたいと願いました。修士では立証できる実験を深める予定でしたが、先行文献から看護師による看護の違いの追究が先決であると気づきました。看護師の遷延性意識障害患者への対応はどのような変化の過程をたどるのかを調べていく必要があります。実験で明確にできないことを質的研究に委ね、看護師の語りから問題解決の糸口を見つけようとするに至りました。

昨年からは研究会に参加し、初心者マーク付きの状態です。皆に感化されながらデータと格闘中ですが、何とかまとめて実践に役立てたいと思っています。

.....

松繁 卓哉(国立保健医療科学院 福祉サービス部)

現在、国立保健医療科学院 福祉サービス部で研究員をしています。この部署は、高齢者介護の問題から、児童養護、生活困窮者保護の問題まで、福祉全般に関わる調査研究を行っています。恥ずかしながらこの職場に来るまで「福祉」がこれほど広範囲に及ぶ領域であるとは考えてもいませんでした。(そのため今は勉強につぐ勉強の毎日です。)

その中にあって、個人としては「在宅ケア」「在宅医療」の研究に注力しており、国内外の先進事例の实地調査に従事しています。ご存知の通り、近年では従来の「往診」「訪問看護」の範疇を越えて、在宅医療のあり方が大きく変わろうとしています。例えばフランスでは「在宅入院 (Hospitalisation à domicile)」の制度が整えられており、自宅を「病院の延長」として捉えて(精神疾患を除く)全ての急性期を過ぎた患者の治療が、施設医療と同じ条件下で行われています。そこでは抗がん剤治療から終末期ケアに至るまで福祉・医療の多職種連携による在宅サービス提供体制が整えられつつあります。学位論文の研究の中で私は「患者中心の医療」という言説をテーマに取り上げたのですが、その延長として「医療実践の場が在宅へと移行することで、患者の経験や患者－医師関係がどのように変容していくのか」という点にも関心があります。

研究について難しいと思うところは、やはり視点の確保に関することです。国の研究機関であるために、研究は「マスで捉える」ことが中心となる傾向があるので、時々、自分の取り組みを振り返っては「個々の生の現実から遠ざかっているのでは」と感じることもあります。

今年は、ここ数年自分に課していながら中々果たすことのできなかった宿題「M-GTA で論文をまとめあげる」ことを実行できたらと考えており、現在、上記テーマでデータを収集しています。(こうやって公言することで、何とか怠け者の自分に鞭を打っていけたらと思っています。)いつか研究会の場をお借りして報告をさせていただきたいと思います。その時はどうぞよろしくお願いいたします。

.....

横山豊治(新潟医療福祉大学社会福祉学部社会福祉学科)

もう6年ほど前のことですが、M-GTA 研究会の公開研究会が新潟県上越市で行われるというご案内を、現在、世話人となっておられる小嶋章吾先生からいただいた折に、興味を抱きながらもどうしても都合がつかずに参加できずにいたことがずっと心残りでした。

その後、弘文堂のシリーズで木下康仁先生らの著作に触れ、益々関心を抱いたものの、これは実際の研究例を経験者の方々から直接伺わなければとても理解しきれないと思うようになり、旧知の小嶋先生のもとを昨年の夏に仲間とともに訪ね、基礎的なレクチャーを受けたのが、この研究会への入会の契機となりました。ただ、せっかくの研究会が他の所用と重なって思うように参加できず、「この身が2つあれば」と嘆くこともしばしばです。

私が研究上の関心を向けているのは、「ソーシャルワーカーの成長過程」であり、現在は現場実践を経験しながらリカレントで大学院修士課程に学び、修了後も実践を再開・継続しているソーシャルワーカーを調査対象にしています。仕事だけでも十分に忙しいソーシャルワーカーが、なぜ、わざわざ大学院に通おうと思ったのか、そしてどのように諸条件を調整し、努力をして社会人院生として過ごし、その結果、ソーシャルワーカーとしてのありようにどのような変化を感じるようになったのか—というところに着目しています。

インタビュー調査をしていくうちに、いかに相手の言葉で語らせるかに腐心するようになりました。

もともと日常的に面接を行う医療ソーシャルワーカーをしていた自分ですが、調査としてのインタビューにはまた別の難しさがありました。

しかし、テープ起こしをして文字化すると同じ「そうです」というひとことであっても、音声で聴くと1回のインタビューの中に、その口調や勢いにそれまでと明らかに異なる強さを伴う場合があります。相手からまさに「わが意を得たり！」と身を乗り出してくるような反応です。そのような部分を、できる限り豊かに語ってもらえたらと思うこの頃です。

.....

◇第2回修士論文発表会のご案内

【日時】9月19日（土）10:00～18:00、

【場所】東京大学（本郷キャンパス）

法文2号館2階 2番大教室

内容については送付済eメール、M-GTA研究会HP等をご参照下さい。

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/>

◇編集後記

・SV合宿で青森、恐山に行ってきました。恐山は様々な人々の多様な思いが濃厚に息づいている場所でした。イタコの口寄せ体験をされた方も。恐山宿坊では、朝のお勤めをし、院代の法話を聞きました。皆さんそれぞれ印象に残ったところは違うのですが、私が東京に戻って再認識したのは、他者（死者も含め）との関係性を通して、関係性を作りながら自己を作っていくという関係性への意志のようなものです。私たちも何かの「縁」で研究会に集まったのですが、関係性を作っていく自分にとって意味のあるものにしていくのは、それぞれ一人一人に委ねられています。今回の合宿ではSVのガイドライン作りのディスカッションを行いました（恐山温泉のようにかなり濃厚）。遠からずこの成果はみなさんに還元していく予定です。研究会では様々な機会を提供していますが、こうしたネットワークをぜひご活用いただきたいと思います。ちなみに恐山温泉も雰囲気たっぷり良かったです。今度は坐禅しにいきます。（佐川）

・おつかれさまです。今号から佐川編集長にお仕えすることになりました竹下です。未熟者ですが、よろしくお願いします。発表者や会員の皆様からの積極的な原稿ご協力のお陰で、今号も読みごたえあるものになりました。NLは、各地で独り研究をされている方々にとって、とても有用な資料だと思います。これからもさらにお役に立ちたいと思いますので、ご要望など、お気軽にお寄せ下さいませ。（竹下）